

Ⅶ 考

察

1 新潟県における火葬墳墓

新潟県における墳墓調査例は、中条町韋駄天山^(註1)、笹神村華報寺^(註2)、小千谷市岡林^(註3)、十日町市小黒沢^(註4)、柿崎町金谷^(註5)、上越市善光寺浜^(註6)、粟島浦村観音堂^(註7)、真野町真輪寺^(註8)などがある。このこれらの調査は、最初から目的を持って調査されたものはほとんどなく、偶然に発見されて調査されたものがほとんどである。この事は、地表に何らの標識も具備せず、地表観察からはその位置を求めることは不可能な場合が多く、中世墳墓の特徴を如実に示している。

分布は県内全域に見られ、そのいくつかは古寺社の近くに位置している。立地は寺域内にある華報寺、善光寺浜、観音堂、真輪寺、台地先端部もしくは丘頂にある韋駄天山、金谷、平地で墓を周辺よりわずかに高い所に構築している岡林、小黒沢に分けられる。骨蔵器は、珠洲系の陶質土器で華報寺、金谷、小黒沢、観音堂などより出土している。古瀬戸の瓶を骨蔵器に転用したものが華報寺、善光寺浜より、石櫃のものは華報寺伝高阿闍址より出土し、この中に徳治3年(1308年)の銘を有する青銅製骨蔵器が納められている。岡林のものは中に嘉暦3年(1328年)の銘を有する銅製宝篋印塔型骨蔵器が納められている。また小黒沢のものには、正平8年(1351年)の銘を有する墓標を伴っている。中川成夫氏は、館と石塔の関係を把握するために塩沢町周辺^(註9)、新井市周辺^(註10)の宗教関係遺品の調査を、細矢菊治氏、小野田十九氏らは、県内各地の石碑及び石塔・石仏類を集成されつつある。石塔類は外部施設としての墳墓標識であることはいうまでもないが、その内部構造については追求されていないのが、墳墓研究の現状である。一基のみ単独で発見されることもあるが、4～5基ないしは数10基も群集して存在することも多い。外部形態は、そのほとんどがマウンドを持っていたものと考えられるが、墳丘の盛土が流失して、その所在地不明のものがかなりあるようである。内部構造に礫を用いているものは、華報寺、金谷、韋駄天山などの墳墓のみならず、柏崎市軽井川経塚^(註13)、長岡市糠塚^(註14)などの経塚にも見られる。華報寺の伝高阿闍址のものは、周囲に石を築き、周囲と区画してその中央部に土盛をし、板石で石棺状の遺構を築き、その中に骨蔵器を納め、周辺部・上部に覆石が見られる。金谷、軽井川経塚などでは、外容器の底部の周囲に大形の礫が用いられ、堅固な石組をそなえて骨蔵器を固定している。そして、墳頂には所によって濃淡の差はあるが、小さな礫石が中央部に厚さ10cm内外を有して葺かれている。火葬骨埋納穴の類例は県内では見られず、新潟県の火葬の埋葬形式として把握されるか否かは、今後の調査資料の増加をまちたい。葺石を伴う墳墓は、県内の中世墳墓の一般的なあり方であると考えられる。

2 出土遺物の年代

本墳墓で出土した陶磁器類は日用雑器であり、その年代は、蛇の目を有する皿類、古伊万里の碗・徳利などから大略導き出せるにすぎない。

埋納穴伴出の碗・皿は桃山時代より江戸時代初期のもので、唐津的な焼物である。また黄瀬戸皿^(註15)